

Toshiya Shimoyama

下沢敏也

— 北の大地から —

前衛作家として名高い下沢敏也氏の個展が9月初旬、東京・新宿の柿傳ギャラリーで開催された。

国内では関西方面での活動が多いという中、

今回、東京初の茶陶を中心とした内容とあって

訪問客も幅広く、展覧会は盛況裡だった。

あえて北海道の土で制作するという

織部・粉引・罅裂。

その見応えある作品の一部を紹介しよう。



会期2日の夕方から開催された、下沢敏也氏×森孝一氏によるギャラリートークの様子。

陶芸家、
下沢敏也氏



美術評論家、
日本陶磁協会
常任理事
森孝一氏



第1展示室には、主に懐石の器が展示された。
壁面に飾られた陶板(左/W 181×H 61cm)
も下沢氏制作によるもの。



ギャラリートーク後に行われた小宴では、親しい 陶板 W20×H20cm
人たちとの楽しいひとときとなった。



オブジェ W 31×D 16×H 106 cm。
ギャラリー入口付近に展示された下沢氏の代表作。

「長い時間の経過の中で土や植物、生物が生きながらえて、そしてまた朽ちていく。その朽ちていくギリギリの質感が好きだ」と話す下沢敏也氏。「風化から再生」をテーマに、土の質感を生かした作風で前衛陶芸では高く評価されている。その一方で、茶碗や陶管といった茶陶にも挑戦し、10年ほど前から自由で造形豊かな織部を焼く。

今回、その器に限定した初個展が9月初旬、東京・新宿の柿傳ギャラリーで開催された。柿傳ということもあり、会場には茶陶を中心とする茶碗や水指、風炉、釜、茶入、花入と、陶管や大皿、小皿、板皿といった懷石の器、計80点が展示された。

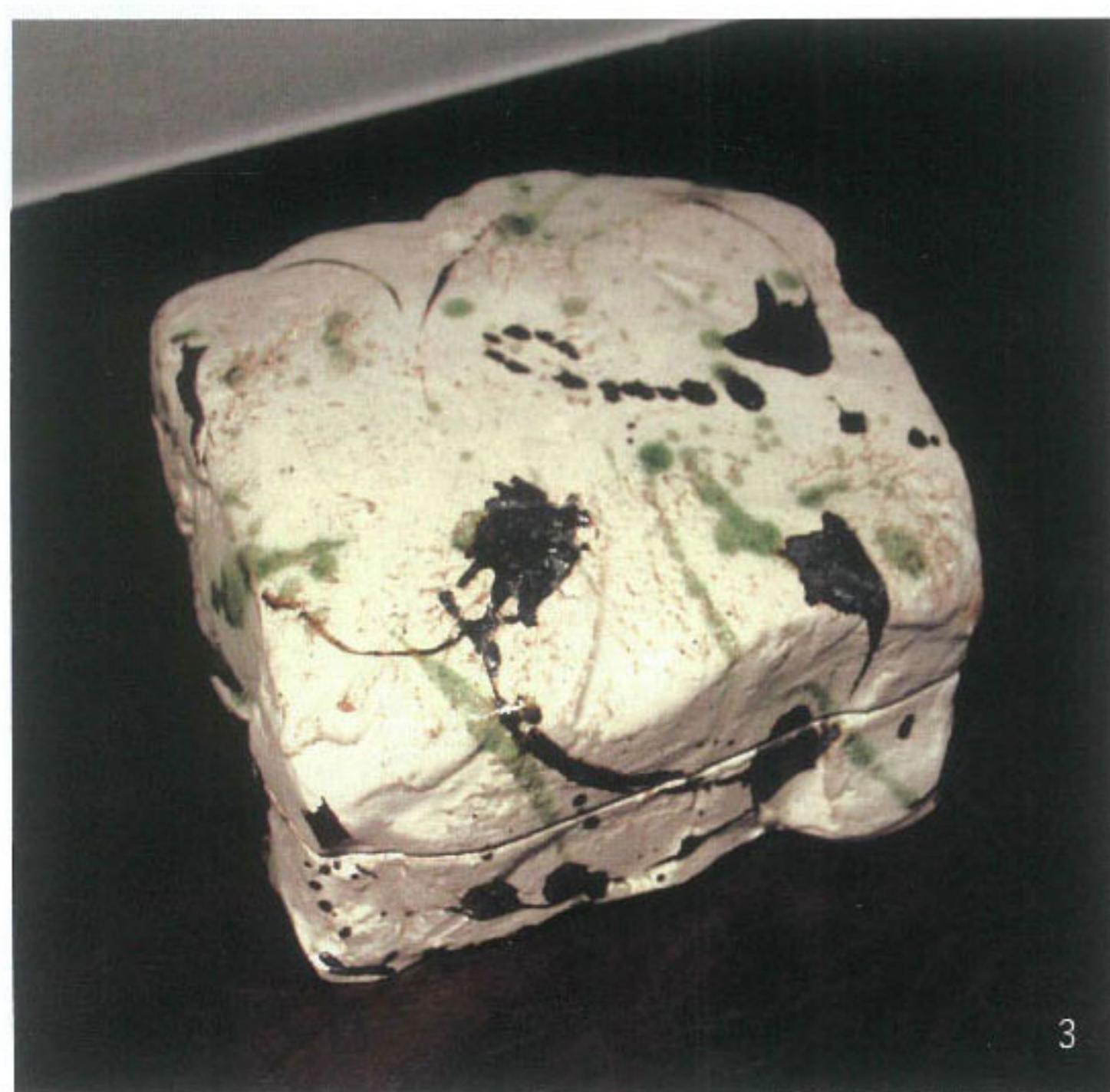
「東京初といつても特別に奇を衒うわけでもなく、織部、粉引、罅裂と、普段の僕の仕事を見ていただく内容です」と静かに語る下沢氏。

会期2日目は下沢敏也氏と森孝一氏(美術評論家・日本陶磁協会常任理事)によるギャラリートークが開かれ、「北の大地から」というタイトルに関連し、北海道という土地柄や、下沢氏の父であり、北海道陶芸の地盤を築いた下沢泡の話をされた。

「僕は画面を描いて構築していくというよりは、作りながら閃きを取り入れていく即興型なので、鉄絵を描く時も集中して一気に筆を走らせるます。絵付けはとにかく筆勢が大事なので。でも、終わった後の周りはひどいもんですよ(笑)」

そして今回、もつとも織部らしい風格を漂わせているのが、陶管・重管。ヘラ目による強烈な削ぎと猛然な勢いに息をのむ。

「陶管は、すべて削り貫きです。タタラではあの表情は出せません。まず、最初に土の塊で概形を作つてから、ヘラで表面を削ぎ落として土の表情を出していきます。削れる硬さになるまで1ヶ月ほど置いてから、中身を彫つていく。1つ完成するまでに、約3ヶ月かかります」

1.鱗裂紋茶碗 $\phi 12 \times H 8\text{cm}$ 2.織部大鉢 $\phi 37 \times H 9\text{cm}$ 3.白織部鉄絵紋陶笞 $W 19.5 \times D 18.5 \times H 10\text{cm}$ 4.織部重笞 $W 17 \times D 15 \times H 18\text{cm}$ 下沢 敏也
Toshiya Shimozawa

1960 北海道札幌市生まれ
1978 故父下澤土泡氏に師事
1982 信楽町研修
1990 陶工房shimozawa設立
1997 ニューヨーク Parsons School of Design
(北海道文化財団芸術家海外研修)
2005 円山陶房設立／代表
2009 札幌文化奨励賞受賞
2011 北海道文化奨励賞受賞
2013 [Shimozawa Toshiya作品集] 中西出版より刊行
【主な個展】
2001 陶展(ギャラリーマロニエ・京都)
2005 陶展(伊丹工芸館・伊丹市)
2010 「Re-birth 2010」起源-(札幌・茶廊法邑)
2011 「Re-birth 2011」(札幌・ギャラリーレタラ)
「風化から森へ II」(札幌芸術の森美術館中庭)
2012 「Re-birth 2012」(東京・ギャラリーTAO)
2016 「風化から再生へ II」(札幌・ギャラリーレタラ)
2017 LIXIL GINZA(東京)
【主なグループ展】
2010 「札幌彫刻家招請日韓交流展」(韓国)

抽象彫刻30人展 - 北の作家たち(札幌彫刻美術館)
2011 folding cosmos展(ニューヨーク)
2012 folding cosmos展(イギリス)
2013 folding cosmos berlin展(国立ダーレム美術館・ベルリン)
2014 光州・北海道交流展2014(光州国立博物館・韓国)
黒竜江省・北海道美術交流展(黒竜江省美術館・中国)
2015 HOPE REPORT展(Park Soo KeunMuseum/韓国)
北海道・黒竜江省美術交流展(コンチネンタル
ギャラリー・札幌)
2016 日本陶磁協会 林屋清三記念茶会(札幌・東本願
寺別院、ギャラリー創)
「北海道・黒竜江省交流美術展 in ハルビン」(黑
竜江省美術館・中国)
2017 北海道の陶芸(道立近代美術館・札幌)
【作品収蔵・パブリックワーク】
北海道立近代美術館(札幌)、札幌芸術の森美術館(札幌)、
江別セラミックアートセンター(北海道・江別市)、黒竜江省
美術館(中国)、ウィステリアN17(札幌)、草津タワー(滋賀
県・草津市)、野村不動産プラウドナゴヤドーム、ロジエガ
ーデンプレイス(札幌)、ロジエ宮の沢(札幌) Accent BLD
(大阪)他

「僕の場合、緑に変色する手間のギリギリまで弱還元をかけるんです。そうすると銅独特の被膜も出ないし、鉄絵の発足が抜群に良くなっています。」
窯出しされた陶笞には荒々しい緑の釉肌が現れ、北海道の原野を彷彿させる。
「観る人によっては、そう感じられるかもしれません。が、僕自身はそれを意識したことはありません。もっと自然体で、自分の中でパッとと思い浮かんだ表情や、試しているうちに偶然現れた色だったり、そういうことを自分の作品に結びつけています。」
今回、織部以外にも違った趣の土の表情を持つ粉引や、銀彩に鮫肌のような網状のひび割れ模様が特徴の下沢氏オリジナルの鱗裂茶碗も展示了された。
これまで、刺激を求め、産地が多く集中する関西を中心に活動をしていた下沢氏だが、今回、東京でも反響が良く、次につながる個展になつたと語る。

最後に、今後の展望を伺つた。

「最近、平面の仕事が面白くなつてきて、今後は平面の方にも注力していきたい。この会場にも数点展示したんですが、金色の陶板は純粹な陶板ではなく、バーナーワークの技法を駆使しています。器は今後も織部や粉引、鱗裂紋等をやつていきますが、既成概念にとらわれない、新しい観点を持ち続けていきたいと思います」

焼成には織部専用のガス窯を使用するという。流れやすい釉のため、焼成中に釉が飛びこむこともあるため、焼く時は窯が全部織部だという。焼成温度は約1250℃で約25時間。